子どもたちが現地理解をより深めるために

── 現地の題材を教材化する取り組み ──

前ヨハネスブルグ日本人学校　教諭
静岡県浜松市立尾奈小学校　教諭　工　藤　幸　徳

キーワード：現地理解，自作教材

１．はじめに

標高約1600mという高地に広がるヨハネスブルグ市。金やダイヤモンド等の鉱山資源に恵まれた国家であるが，その資源があるがゆえに，争いの絶えなかった国でもある。そして，南アフリカの歴史の中で忘れることができないのが，白人政権によるアパルトヘイト政策である。1991年に廃止されるまでに，多くの黒人が犠牲になり，今もなおその傷跡が深く残っている。1994年のネルソン・マンデラ氏が黒人初の大統領に就任し，多くの民衆が生活が改善されることに望みを抱いたが，利益の多くは一部の黒人層に留まり，大部分の黒人層は貧困に苦しむ生活が今も続いているのが現状である。

そんな中で一番の心配は治安の問題である。アパルトヘイト撤廃後の治安の悪化は著しく，外を自由に歩けない状況にある。犯罪発生率は日本の100倍以上といわれ，各家の周りは高い塀で囲まれ，その上部には電流の流れるエレクトリックフェンスが備え付けられている。昼間でも強盗や殺人などの事件には気をつけなくてはならず，我が家でも，セキュリティ犬を雇い，安全には十分に留意していた。

そのような状況のため，日本人学校に通う子どもたちも外を自由に出歩くことはなく，いつも守られた空間の中で生活をしている。生の南アフリカの生活の様子や貧困の現状には触れることができないのもしょうがないことである。しかし，現在南アフリカで問題になっていること，たとえば貧富の差が激しいことやHIV/AIDSの感染率がかなり高いことなどを知ることは大切なことである。それ以上に，彼らが生活改善のためにどのような気持ちで生活しているのか，どのような取り組みをしているのか等彼らの考え方に触れることが現地理解につながるのではないかと私は考える。

そのような考えのもと，現地に住む日本人の方にエスコートしてもらいながら黒人居住区（以下，タウンシップと呼ぶ）の生活に触れ，自作教材を作ることで子どもたちに伝えようと考えた。

タウンシップにて子どもたちと写真を撮る

２．活動の実際

(1) 自分が現地を知ることから

まずは自分が現状を理解するためにと軽い気持ちで訪れたタウンシップでは，HIV/AIDSが生活を苦しめている現状が嫌というほど伝わってきたのが衝撃的であった。感染者への差別，それを避けるために黙っていることで起こる感染拡大，小さなコミュニティーの中にも100人を超えるエイズ孤児がいるという現実は，豊かな国で育った私たちでは想像できない状況であった。

さらに，現地の学校を見学した折に感じたことは，教育の質の低さである。日本のような共通の教科書は存在しないため，学校独自が用意した教材を教科書として使っている。しかし，教科書を買うお金がなく数人でコピーを

見ながら授業を進めていたり，教師主導の一斉授業がほとんどであったりする。教育への期待や学ぶことに対する喜びを感じている子も多いと思われるが，一年100Rand，ランド（日本円で1500円ほど）という授業料が払えない家庭も多く，現実はかなり厳しいと思われる。

そのような状況の中で，ボランティアで子どもたちの輝きを取り戻そうとする一人の黒人写真家と出会った。

(2) 見て，感じたことを教材に！

彼の名前はビクター・マトム。彼はプロの写真家として活動する傍ら，貧しい子どもたちに写真の撮り方を教えるボランティアを行っている。彼と初めて会ったとき，彼は優しい瞳で私に教育の大切さや国の未来の在り方について語ってくれた。その話の後，彼は自分の教室に案内してくれることを提案，一緒に向かうことになった。そこは，電気も水道もない小さなバラック小屋の並ぶスコッターキャンプで，一本の木の下が彼の教室だと言う。しかし，そこに集まった子どもたち（私が行った時は10人弱であった）は，純粋な目でマトム氏の話に耳を傾け，将来は写真家を目指そうという笑顔で満ち溢れていた。

マトム氏曰く，「大切なのは，夢を持つこと。我々が子どものころは夢を持つことが許されなかった時代。そして，今をより豊かに生きるためには教育が大切だ」と。私は自分たちの生活を自分たちで変えていこうとする彼の考え方にとても感動し，負のイメージの多い南アフリカであるが，彼のような取り組みをしている人を日本人学校の子どもたちが知ることで，南アフリカの今をよりよく理解できるのではないかと思い，彼へのインタビューをもとに，彼の活動についてまとめようと考えた。

(3) 自作教材「将来はプロの写真家」

彼の名前はビクター・マトム。南アフリカに住むプロの写真家です。彼は，今も自分のとった写真をいろいろな場所に行って紹介し，彼が実際に経験した「アパルトヘイト時代」の辛くて悲しい事実を，今を生きる人々に伝えています。と同時に，SOWETOに住む貧しい子どもたちに，ボランティアで写真の使い方や撮り方などを教える活動をしています。彼は写真を通して，子どもたちに何を伝えたいのでしょうか。このお話は，今も南アフリカのいろいろな場所で活動する彼の心の活動のほんのわずかな紹介です。

一本の木の下で開かれる写真教室の様子

ビクター・マトムさんは，1959年，SOWETOに生まれました。ビクターさんの生まれた時代は，まさに，「アパルトヘイト」という黒人の人たちが差別をされ続けてきたまっただ中で，ビクターさんもまた，貧しい家庭に生まれました。毎日の生活はきびしくて，学校に行くためのお金も十分にはありませんでした。でも，ビクターさんにはお医者さんになるという夢がありました。「ぼくの力でたくさんの困っている人たちを救えたら」と強く願っていたのです。

だから，一生けん命勉強をしながら，道路の穴を埋めてお金を稼いだり，そのお金で中古のカメラを買って，近くの人たちを撮ったり，結婚式の写真を撮ったりしてチップをもらい，生活を支えていました。そう，ビクターさんが初めてカメラと出会ったのは13才の時でした。

そのころ，黒人の人たちの多くは，金やダイヤモンドを掘るための炭坑で働いていました。そのほかにも，学校の先生，お医者さん，看護婦さん，警察官などになる人もいましたが，その仕事につく人はとても少ない人たちに限られていました。

そんな中，ビクターさんは，プロの写真家を目指すきっかけとなる写真と出会いました。それが，1976年，ソ

ウェト蜂起のヘクター・ピーターソンくんが銃でうたれたことを伝える写真です。この写真がきっかけで，世界中の人々が南アフリカのアパルトヘイトを非難するようになりました。

「写真には，人々の心を動かす力があるんだ。すごいぞ。ぼくも，多くの人にぼくたちの，南アフリカの今を伝えたい！」

ビクターさんは，強くこう思うようになったのです。

しかし，ビクターさんにカメラのことについて教えてくれる人はだれもいません。だから，ビクターさんは，自分自身で勉強をし始めました。本屋でカメラの雑誌を買えずに立ち読みすることもありました。カメラについてくわしく勉強することは大変でしたが，自分が「学ぶ」ことができる喜びを感じていたのであまり苦にはなりませんでした。もっと大変だったのは，自分たちのとった写真を発表しようとすると，政府の人たち（白人）がよく思わなくて邪魔をされたことです。でも，ビクターさんはあきらめませんでした。だって，自分にできることがあるのだから。

プロの写真家となった今，ビクターさんはまた，新たな目標を見つけました。そう，子どもたちに写真の撮り方を教えようと考えたのです。ビクターさんの生まれ育ったSOWETO地区では，今もなお生活が苦しくて，子どもたちが自らやってみようと思えることはありません。家には電気もなく，水道もない生活をしている家庭も多くいました。子どもたちにとってカメラは「奇跡のおもちゃ」と言えます。ビクターさんは，カメラを通して，子どもたちが自分たちの生活を自分たちの見えるすがたで記録に残すことが大切だと思っています。

だから，ビクターさんは，ドネーションとしてもらったカメラ数台を使い，子どもたちが自分たちでよいと感じた光景をカメラに収め，それらの写真を子どもたちと見ながら，そのよさなどについて話し合います。

「これは，どんな写真が撮りたかったんだ。」

と，ビクターさんは，優しく子どもたちに話しかけます。子どもたちは，ビクターさんの話に耳を傾け，自分がシャッターを押した写真に見入っていました。カメラのもつ魅力だけでなく，「こんなふうにとるんだ！」と自分で決める力（自己決定力）を身に付けることが子どもたちに必要なことだとビクターさんは言います。

また，ビクターさんは，最も大切なのは教育だといいます。

「新しいことを学ぶ楽しさを知ってほしい。そうしたら，自分でもっといろいろなことをやってみようと思えるはずだから。」と。

ビクターさんが，SOWETOの小さな場所で始めた写真教室の卒業生は，今，100人を越えています。ビクターさんの教えている子どもたちの家には，今も電気はありません。水道もありません。でも，子どもたちがのぞくカメラの先には，彼らの将来が映っていることをビクターさんは思っています。

この教室の卒業生の中には，今，新聞社で働いていたり，ビクターさんと同じようにプロのカメラマンになったりした人もいます。きっとビクターさんの「学び続ける」姿が心に焼きついているのでしょう。

これからもより多くの子どもが，未来に希望をもって生活できるようビクターさんの活動は続いていきます。一本の木の下から。

３．活動のまとめ・考察

この授業の始めに，子どもたちに彼の撮った一枚の写真を提示した。それは，一人の子どもが家の中で外の明かりを頼りに勉強している様子の写真である。

「この写真からどんなことが分かる？」

と聞くと，子どもたちは口々に「床で勉強している」とか「家の中が暗いのは電気がないからだ」「ベッドがあるけど，床にそのまま置いている」など気がついたことを挙げていった。現在もなおこのような生活を送っている子どもがたくさんいることを知らせると，自分の今の生活との違いに驚きを隠せない様子であった。アパルトヘイトと

いう「差別」に対しては「絶対いけない」と分かっていながらも，生活の違いから差別の意識を持っていることに子どもたちが気付いていなかったからだ。

その後に自作教材文を読み，ビクターさんがどんな気持ちでカメラマンになったのか，子どもたちに何を伝えたかったのかを考えさせた。一枚の写真が，彼の心を大きく動かす原因となり，「学ぶ」ことに貪欲であった彼の気持ちや豊かな心をもって生きることの素晴らしさ等を子どもたちも理解することができたと思う。次に挙げるのは子どもたちの発表である。

「ぼくたちは，いろいろな教育を受けられて幸せだと思った。また，ボランティアで写真を教えるなんてすごいと思った。」

「ビクターさんの話を聞いて，私たちにとって大切なことが分かった。たとえ貧しくても夢がもてること，だから，私もこれから夢や目標をもって毎日を過ごしたいと思った。」

子どもたちが普段接する黒人は，学校スタッフと各家庭のメイド程度であり，コミュニケーションを交わす機会も少ない。この授業を行ったのは４・５年生の道徳の授業であったが，子どもたちは，ビクターさんの伝えたいことをしっかりととらえ，自分の考えを発表することができた。黒人が受けてきた差別を知るとともに，貧しいから心まで貧しくなるのではないことを少し理解できたのではないかと思う。

今回はボランティアというテーマでこの教材に迫ったが，これを使っていろいろな切り口で子どもたちに伝えることができることを感じた。夢を持つことの大切さだけでなく，今の自分たちとの環境の違いに気づき，自分も何か変わらなければいけないと感じた子がいたことは成果であったと考える。

また今回，自分が体験，インタビューしたことを教材としてまとめてみたが，現地で撮った写真や新聞の切り抜きなども学校資料としてまとめておき，現地を理解する資料集として積み重ねていくとよいと感じた。